

第4章

新宿区における 東京2020大会のレガシー

第4章 新宿区における東京2020大会のレガシー

◇大会を契機とした取組みを通じたレガシーの創出

IOCが定めるオリンピック憲章において「有益なレガシーを開催都市と開催国に残す」ことが求められているように、東京2020オリンピック・パラリンピックを一過性のイベントとすることなく、有形、無形のレガシーを数多く残していくための取組みが非常に重要です。

このため、第2章及び第3章でご紹介したとおり、新宿区においても大会後を見据えつつ、ハード・ソフトの両面にわたる多様な取組みを、大会開催を契機として推進してきました。また、これらの取組みの推進にあたっては、区民の皆さん、地域団体、学校、事業者など多くの主体の参画を得ながら「オール新宿」で取り組んできました。

こうして構築してきた取組みやつながりが新宿区における東京2020大会のレガシーとなるよう、今後のさらなる区政の発展につなげていくとともに、次世代へ継承していきます。



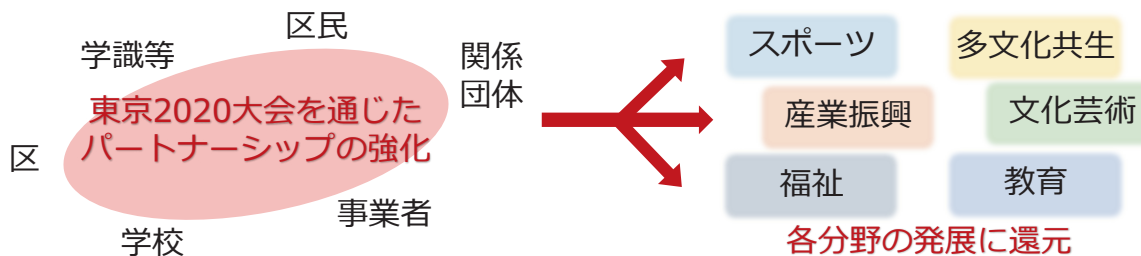
1 各主体間の連携

大会を契機とした取組み（まとめ）

- 「新宿区東京2020大会区民協議会」を設置し、区民・関係団体・区における情報の共有及び連絡調整を行ったほか、スポーツの普及、ボランティア意識の醸成、文化芸術の振興、障害理解などさまざまな視点から、大会の気運醸成に向けた検討を行いました。
- 区主催のカウントダウンイベントでは、多くの団体、学校、企業が主体的に参画したことにより、主体間の連携が生まれ、効果的な事業推進につながりました。

レガシーと今後の取組み

東京2020大会に関する取組みを通じて、多くの主体の参画・連携につなげることができました。今後は、このパートナーシップやノウハウをスポーツ、福祉、教育、産業振興、文化芸術、多文化共生など、各分野における発展に還元していきます。



2 参加・体験

大会を契機とした取組み（まとめ）

- スポーツ体験などの各種取組みを通じて、子どもたちを中心に多くの区民の皆さんがオリンピック・パラリンピアン等のトップアスリートと交流しました。特に、パラスポーツの体験の機会の創出や普及への取組みを通じて、パラスポーツの認知度向上や障害理解の促進を図りました。
- 学校連携観戦プログラムによるパラリンピック競技観戦などを通じて、多くの子どもたちに大会と関わる機会を創出しました。また、パラリンピック聖火の採火式や聖火ビジットなど、将来にわたり記憶に残る催しを実施しました。

レガシーと今後の取組み

次世代を担う子どもたちにオリンピック・パラリンピックの精神を継承

子どもたちがアスリートとの交流を通して得た気づきや、大会の観戦を通じて得た学びは、子どもたちにとってかけがえのないものです。こうした記憶をレガシーとして、次世代に継承していきます。



将来にわたって区民の記憶に

東京2020大会をテーマとした写真展のほか、大会で使用されたボッチャの床シートの活用などを通じて、大会の記憶や感動を共有していきます。



写真展イメージ

スポーツ体験イベントの継続

今後も子どもたちや区民の皆さんを対象としたスポーツ体験教室を実施し、スポーツの普及に取り組みます。



3 装飾・展示

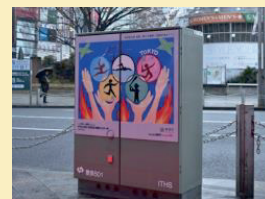
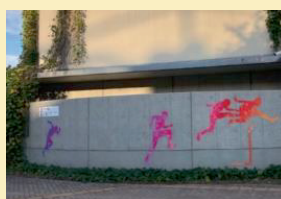
大会を契機とした取組み（まとめ）

- 大会気運を盛り上げるため、区役所本庁舎をはじめとする区施設の壁面や出入口等を、大会エンブレムなどを活用してラッピングしました。
- 子どもたちを対象に募集した絵画コンクールの作品を活用し、配電地上機器のラッピングを行いました。また、区立学校等には、陸上競技のスピードや跳躍力を実感できるように、陸上競技シルエットシールを設置しました。
- 東京2020マスコット像や東京2020聖火リレートーチなど東京2020大会を象徴する物品の展示を行っています。

レガシーと今後の取組み

子どもたちの取組みや学びを有形のレガシーとして

区立学校等の陸上競技シルエットシールは、引き続き有形のレガシーとして残し、各学校等で活用します。配電地上機器のラッピングは、令和6年度まで掲出を続け、子どもたちの熱い想いを発信し続けます。



大会の感動と記憶を街に刻み、次世代へ引き継ぐ

東京2020マスコット像や東京2020聖火リレートーチ等の展示を通じて、大会の記憶と感動を引き継いでいきます。

また、パラリンピック聖火の採火式の記憶を伝える銘板を制作し、区役所本庁舎に設置します。



聖火リレートーチの展示



銘板（イメージ）

4 情報発信

大会を契機とした取組み（まとめ）

- 区内14か所にデジタルサイネージを設置し、東京2020大会開催までのカウントダウンや、気運醸成イベントの写真等の放映を通じて、大会のPRを行いました。
- ホームページや広報新宿などを通じて、東京2020大会の公式情報や、大会の開催に向けた区の取組みなどを広く周知しました。

レガシーと今後の取組み

デジタルサイネージを地域情報の発信等に活用

東京2020大会のPRを行ってきたデジタルサイネージは、特別出張所における地域情報の発信や、スポーツセンター等における施設の利用案内に活用します。



5 ボランティア

大会を契機とした取組み（まとめ）

- 平成31年5月に新宿区の独自ボランティア「新宿2020サポーター」を創設し、500名の方に登録していただきました。
- 感染症の影響による事業の中止等に伴い、活躍の機会を十分に創出できませんでした。のべ126名の方に気運醸成イベント等で活動していただきました。
- 東京2020組織委員会が募集する「フィールドキャスト」及び東京都が募集する「シティキャスト」の制度周知を図りました。

レガシーと今後の取組み

大会に向けたボランティアマインドを活かして地域での活躍へ

区内には、身近な地域で手軽に始められるさまざまな地域活動やボランティア活動があります。新宿2020サポーターで培ったボランティアマインドを、新宿区や新宿未来創造財団、新宿区社会福祉協議会が募集する地域活動の中で活かしていただけよう促していきます。



6 地域

大会を契機とした取組み（まとめ）

- 平成31年3月に設立した「新宿区東京2020オリンピック・パラリンピック区民参画基金」を原資とした助成事業により、東京2020大会の気運醸成に資する区民の皆さんの自主的な活動の実現につながりました。
- 令和元年度には、区内10地区において、各地区の特色を生かした大会気運醸成事業を実施しました。

レガシーと今後の取組み

大会への想いを地域全体で共有し、一体感を創出

大会後も東京五輪音頭-2020-を地域の祭りで活用して、大会のレガシーを地域全体で共有していただくため、東京五輪音頭-2020-のCDをすべての町会・自治会に配布しました。

また、大会後における地域の自主的な取組みについては、地域コミュニティ事業助成を通じて支援します。



区民参画基金の残額はスポーツ施設の整備に活用

大会の終了に伴い、令和3年度で東京2020オリンピック・パラリンピック区民参画基金は役目を終えます。基金の残額は「新宿区スポーツ施設整備基金」への移行を予定しており、スポーツ施設の整備に役立てられます。

7 区の事業推進

大会を契機とした取組み（まとめ）

- 新宿区第一次実行計画（平成30年度～令和2年度）及び第二次実行計画（令和3年度～令和5年度）において、スポーツ、健康、福祉、文化、まちづくり、教育等の各分野における関連事業を、東京2020オリンピック・パラリンピック関連事業と位置付けて推進しています。
- 平成29年度～令和3年度で延べ97の区の事業について東京2020参画プログラム（公認プログラム）の認証を取得し、大会の気運醸成を推進しました。

レガシーと今後の取組み



SDGsの推進

第二次実行計画に基づく
取組みの継続・発展

スポーツ

東京2020大会によるスポーツへの関心の高まりを活かし、さらなるスポーツ環境の整備に取り組みます。スポーツコミュニティの推進や、新宿区スポーツ施設整備基金を活用したスポーツ施設の整備等を実施します。



健康

生涯にわたり心身ともに健康で暮らせる健康寿命の延伸のために、地域社会全体で健康づくりへの意識を高めます。



しんじゆく
健康フレンズ

文化・観光

新宿フィールドミュージアム等を引き続き開催し、新宿のまちの魅力を創造・発信します。

また、新宿の持つ多様な魅力を提供して回遊性を高め、何度も訪れたい国際観光都市・新宿を目指します。



福祉

共生社会の実現に向けて、障害の特性に応じたコミュニケーション支援等の推進や区民への啓発活動等を行い、障害を理由とする差別の解消を推進します。



まちづくり

主要駅や国立競技場周辺等に続き、道路のバリアフリー化や環境に配慮した整備を進めます。

また、区民等のユニバーサルデザインまちづくりに対する理解を深めていきます。新宿中央公園の魅力向上等についても、引き続き取り組みます。

教育

令和4年度以降も大会後のレガシーとして、以下を経常事業にて実施します。

- ・ 伝統文化・芸術等を学ぶ機会の充実
- ・ 障害者理解教育の推進
- ・ スポーツギネス新宿の推進
- ・ 英語キャンプの実施

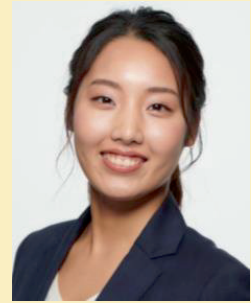


※新宿区第二次実行計画（令和3年1月策定）をもとに作成

～東京2020大会に向けた取組みを振り返って～

三井 梨紗子（みつい りさこ）さん

リオデジャネイロ2016オリンピック シンクロナイズドスイミング銅メダリスト
新宿区スポーツ栄誉賞第1号
新宿区東京2020大会区民協議会特別アドバイザー



リオデジャネイロ2016大会には、選手として出場しました。新宿区の皆さんにもさまざまなサポートや応援をしていただき、オリンピックの舞台に立てたことは、私にとって大きな財産となっています。

そうした経験を活かし、現役引退後は、新宿区東京2020大会区民協議会の特別アドバイザーを務めさせていただくとともに、東京2020大会に向けた区主催の気運醸成イベント等に積極的に参加させていただきました。こうした取組みを通じて、区民の皆さんや子どもたちの思いに触れ、改めてスポーツのすばらしさを実感することができました。

東京2020大会に向けては、新型コロナウイルス感染症の影響により様々なイベントが中止になるなど、うまくいかないことの方が多かったかも知れません。また、コロナ禍で大会そのものが開催できないのでは、という声も数多くありました。

しかし、そういった困難な状況においても、多くの人々の支えあい、助け合いにより、大会が無事に開催されたことを本当に嬉しく思います。この大会の感動や人々の絆は、区民の皆さんの生涯の記憶に残るとともに、子どもたちを中心に、将来にわたってレガシーとして継承されていくと思います。

これからも、スポーツを通して、喜びや感動を伝えていきたいです。

～東京2020大会のその先へ～

新宿区内で事前キャンプを行い、東京2020オリンピック競技大会に出場する難民選手団の選手たちを応援するため、落合第三小学校の子どもたちから応援メッセージタペストリーをプレゼントしました。

**新宿区立落合第三小学校
清水 仁（しみず ひとし）校長**



悩んでいた。大会延期、開催さえ危ぶまれる中、オリパラ教育展開への葛藤。大会直前の難民選手団への応援依頼に「これこそレガシーになる」と直感した。限られた時間で1年生から6年生まで全員が本気で応援に参加できるよう、難民や選手団についてのプレゼン資料と展開計画を作成し、教職員、子どもたちにそれぞれ説明をした。全員、快く協力してくれた。一人一台のタブレット端末が、ここで効果を発揮した。5年生は、難民や難民選手団について自発的に調べ、「選手の母国語、アラビア語で応援しよう」「難民の人たちに服を送ろう」と、行動を起こした。応援のフラッグに書かれたアラビア語のエール。服を集めて送る方法を考え、寄付を募り、自分たちでやり遂げた子どもたち。難民選手団やIOCから感謝のメッセージをいただいたことは、子どもたちの自信と誇りになった。「参加することに意義がある」子どもたちの心に火が灯った。

